

第59回 BCS賞 審査委員講評文

「立川市立第一小学校・柴崎学習館・柴崎図書館・柴崎学童保育所」

山本圭介
山本茂義
賀持剛一

我々が直面している人口減少・超高齢化社会において、地域の核となる公共建築は、どのような姿をとるべきか。この建築はその回答例の一つとなっている。

人口が右肩上がりが増え続けていた社会では、必要に応じて様々な公共施設が個別につくられてきた。それらの建設費と維持管理は、増え続ける税金によって賄うことができただろうと考えられていたのである。しかし人口減少社会に突入した今後は、大きな税金の伸びは見込めない。古くなった既存公共施設の維持管理費が日々増大していく中で、新しい施設は、できるだけコンパクトにつくり、共用化を図って無駄を省きたい。そして維持管理費を抑える工夫は必須であると考えられるようになってきた。

敷地が集約される複合化のメリットは、このような経済的要請に答えるだけでなく、少子高齢化が進行中の社会で、世代間の交流にも役立ち、さらには地域社会の核づくりにも資する。

この施設は次世代を担う子供達が使う小学校・学童保育所を軸に、地域の人々がレクリエーションの場・生涯学習の場として使う学習館・図書館から成り立っている。これらの施設は共用することができる機能を持ち、さらに複合化することで高機能化する内容もある。前者としては、地域開放を前提とした配置のランチルームや家庭科室などの小学校特別教室群があり、後者としては地域図書館と学校図書館の併設などがある。

道を挟んで敷地は大きく2つに分割されている。校舎棟は、小学校・図書館・学童保育所が1階に併設され、学習館の多目的ホールには、小学校の体育館が重ねて配置されていて、合理的な構造となっている。これらが3階にあるブリッジで繋がれ、管理区分を明確にしつつ施設の一体化が図られている。小学校のメインアプローチは、道路を挟んで学習館のロビーに面していて、地域の人たちが子供達を見守ることができる配置になっている。このアプローチに隣接して設けられている図書館には学校図書館が一体化し子供達は豊富な図書に触れることができる一方、小学校の中庭は野外読書室となりうる構成となっていて、複合化のメリットが十分に活かされている。

小学校の教室空間は2・3階に配置され、2つに中庭を中心として卍型の構造壁と可動の間仕切り壁が組み合わされてできている。この空間は目的に応じフレキシブルに大きさを変えられ、日々の使い勝手に柔軟に対応するとともに、変化の大きいこれからの社会の動きにも充分追従可能であろうと思われた。一方、大空間を含む学習館は、リブ付きPC版が互い違いに積み上げられたPCaPC工法で出来ており、街並にリズムカルな独特の表情をつくり出している。

新築にともなって校舎の位置が移動し、グランド越しに古くからある諏訪神社の鎮守の杜が望めるようになった。新しくつくられた複合施設と神社を中心に、この場所一帯が、地域の核となっていくことだろう。



外観 学習館棟側より校舎様を見る



内観 学習館ロビー



内観 開閉可能な間仕切りで繋がる教室とFLA



外観 校舎棟より学習館棟を見る

立川第一小学校は、立川市でもっとも長い歴史のある学校で平成31年度には学校創立150周年の記念行事が行われる。しかし、築50年を経過し、耐震性の問題があるため、新しい校舎に建替えることになった。

建替えにあたって、柴崎学習館と、本来小学校に隣接されるべき柴崎学童保育所を一体の施設として複合化させることになり、児童の安全と良好な教育環境を備えた学校施設、地域の核となる防災拠点としての機能を併せ持つ施設となることを目指している。

片廊下型の校舎は少人数授業やチームティーチングなど多様化している教育方法への対応が難しいため、新しい校舎では、風車状に配置された短冊壁で仕切られた教室と教室の周囲に点在するワークスペースによって、教室内が全てが学習の場となり、将来の新しい授業形態にも順応するフレキシビリティをもつ場となる。また行き止まりのない動線計画となっている。

子どもたちや地域の住民が、安全でいきいきと過ごせる学校・学習館になることを期待している。



内観 図書館

(C) 西川 公朗

DATA

所在地	東京都立川市	構造規模	RC 造一部 S, SRC 造
建築主	立川市		地上3階 / 地下1階
主要用途	小学校・地域学習館 図書館・学童保育所	延床面積	11,939m ²
		竣工	平成26年8月
		受賞	第59回BCS賞